

緒 言

米延策雄

国立病院機構大阪南医療センター

“Pain is for human kind a more dreadful tyrant than death alone”

Albert Schweitzer (1875-1965)

「人にとって、痛みは、死そのものよりも恐い暴君である」このような意味であらうか。密林の聖者と呼ばれた Dr. Schweitzer が患者の痛みはどう立ち向かおうとしていたか？ この文の数行前に「人は死すべき存在であること」を述べ、その後この文がある。このことから推し量るに、20 世紀前半において、医学は病気の快癒に限界があり、医療がなすべきは病気に伴う苦痛の軽減であったのであろう。

20 世紀の医療は病院と呼ばれる。産業の発展、その一部かも知れない数度の戦争、これらにより医学・医療は著しい進歩を遂げた。前世紀において、病院に類する施設が看護や福祉に重点を置かざるを得なかった医学レベルから、病院を設け、そこに医師を集め、検査・治療機器を備え、病気の克服を目指す。これが医療の目指すものとなった。この状況においては、苦痛は診療の出発点とはなり得ても、その解消は原因が解除された結果の一部としか、特に本邦においては、認識されない傾向にあった。

医学の進歩、医療の拡充、それを可能とせしめた社会や経済の発展。多くの先進国では平均寿命が 80 歳を超える。それに伴い、人々が医療に求めるものは、単に生命を永らえるのではなく、より質の高い生活を送れることを可能とさせるものとなった。また一方では、延伸を求めた寿命も限界に近づきつつある。

このような流れの中で、人々が医療に求めるのは痛みの除去である。「痛みさえ治してくれれば」よく聞く言葉である。しかし、原因の除去を通じてしかこれに臨んでいなかった、そして原因の除去が困難な加齢変化が多くの場合の原因となっている今、われわれはしばしばたじろぐ。幸い、痛みの科学は進歩している。痛み悩む患者の捉え方も進んできた。そして、痛みの治療に有効な薬物も増え、臨床使用が可能となってきた。ただし、われわれが馴染んできた従来の治療手段と異なる作用、副作用がある。後はこれらを学び、知識の更新を図り、痛み悩む患者に応えることである。